

英文学科の歴史の中で

宮 澤 是

(1981 年度 B, 1983 年度 M, 1986 年度 D)

私が入学した昭和 53 年当時、文学部は学科募集ではなく、最初の 2 年間是一般教養科目の履修が中心で、基礎演習、外国語科目、各学科の概論や講読 I などが開講され、2 年次後期に志望学科への分属とゼミの選択を行うシステムでした。私はずっと英文学科を希望しており、2 年次の基礎演習 II が永井衷先生担当だったのがきっかけで、永井ゼミに入りました。

当時の英文学科の先生がたは、イギリス文学では河村昭夫先生、笹山隆先生、杉山洋子先生をはじめ、中條和夫先生、森安綾先生、森藤真成先生、アメリカ文学では、私の指導教授の永井先生、嶋忠正先生、小野清之先生、マーク・ルームズ先生、英語学・言語学では蛭沼寿雄先生、北山顕正先生、伊藤清先生、田中実先生という顔ぶれでした。このようにお名前を挙げると懐かしい気持ちで一杯になりますが、京都の田舎から出てきたばかりの私は、永井先生以外の先生がたのことはほとんど存じ上げず、ましてや関学の英文学科がどれほど伝統のある学科であるかということもわかっていませんでした。

先生がたのお姿をしかと見たのは、3 年次の最初に千刈キャンプで行われた英文学科のオリエンテーションのときです。先生がたの自己紹介の中で最も印象的だったのが小野先生でした。壇上に上がって開口一番「鬼の小野です」とおっしゃったのです。場内がどよめいた後、小野先生が何を話されたかは覚えていません。「ああ、鬼に当たった・・・」と呆然としてしまったからです。I から IV まである英米文学講読の中で、3 年次の英米文学講読 II だけが水曜日の 1 時間目（当時、1 時間目は 8 時半開始でした）にクラス指定で開講され、私は小野先生のクラスに決められていました。合格点を取る

のは至難の業、特に男子学生は通らないなどという噂を耳にしていたので、覚悟を決めるしかありませんでした。必死の思いの書き込みでびっしりのマーク・トウェインの *Pudd'nhead Wilson* は、頁がばらばらになりかけて今も本棚に眠っています。

英語学特殊講義の伊藤先生もまた、学生の間で恐れられていた先生で、教壇では決して顔をお上げにならず、低い声で *Better English* の解説をされていました。学生が無断で欠席すると、いつも持っていらした長い定規でさーっと線を引き、名簿からその学生の名前を抹消されるのを見て、学生たちは縮みあがったものでした。そんな伊藤先生が、教室での強面からは想像もつかない優しい笑顔でお菓子を勧めてくださるのを見るのは、私が教学補佐をした大学院時代になってからでした。

永井ゼミではウィラ・キャザーの作品を読んでいたのですが、私はホーソンの『緋文字』で卒論を書くというのが入学前からの夢でしたので、私のわがままを通していただきました。永井先生からは、お酒の飲み方を教わった部分が非常に多かったと言えるかもしれません。元来嫌いではなかったのですが、このあたりからずいぶん酒に強くなりました。関学英文学科がアメリカ文学では志賀勝、イギリス文学では、竹友藻風、寿岳文章、矢本貞幹、といった錚々たる英文学者たちがおられた、由緒ある学科であることを教えていただいたのも永井先生と飲んだときでした。子どもの頃から、英文学科に入ったら大学院まで行かずと英語の勉強を続けたいと思っていましたから、この伝統ある英文学科の大学院に進学したいという気持ちはますます強くなりました。

博士課程前期課程に進学した昭和 57 年は、アメリカ文学専攻の私にとって、いや英文学科にとって記念すべき年であったと思います。それは、神戸女学院大学から大井浩二先生、奈良女子大学から桂田重利先生が英文学科に着任されたからです。お二人については永井先生から伺っていましたし、卒論を書くのに大井先生の『ホーソン論』を読みましたから、著名なホーソン学者であることも存じ上げていました。また、お二人を慕って女学院と奈

良女子から博士課程後期課程に入学する方々もあり、大学院は活況を呈したと言えます。さらに3年後には大阪市立大学から岩瀬悉有先生が着任され、関学英文学科はまさに黄金期を迎えることになるのです。

確かこの昭和57年から大学院の授業形態が新しくなり、指導教授に関係なく、博士課程前期、後期ともにイギリス文学、アメリカ文学、英語学の研究演習が一つずつ開講されることになって、私は桂田先生の研究演習で再び『緋文字』を読むことになりました。桂田先生を指導教授にする後期課程の人や聴講生も含めて10人。桂田先生にぼつりと「じゃあ、宮澤君何か話してください」と言われて、冷や汗をかきながら胃が痛くなったのを憶えています。その後も研究演習の担当が桂田先生で続き、ホーソーンの名編すべてを読むことになりました。

一方、大井先生がお選びになる作家、作品は非常に多岐に渡っており、レオ・マークスやノーブルのアメリカ研究の論文、またトゥエインの *Life on the Mississippi* や、ヘンリー・アダムズの *Democracy* などを読みました。教学補佐をしていた時に、大井先生が後期課程の研究演習で使用されるテキストが丸善から届いた箱を覗いてみると、文学史でも聞いたことのない作家の作品が、しかも3、4冊入っていて、これを一年ですべて読むのかと驚いたことを思い出します。先生のお話は立て板に水で、必死でノートを取りながら、先生の止めどなく溢れる知識と鋭い洞察力にただ感心するばかりでした。

さすが学部とは違う、刺激的な授業を受けることのできた幸せな大学院時代の中でひとつ悲しい思い出は、後期課程2年の時、学部のときから指導していただいていた永井先生が亡くなられたことでした。先生は亡くなる直前まで、入院先の兵庫医大から外出許可を取って授業をされていました。肝臓がんであることは告知されていなかったのですが、酒もたばこも浴びるようにのんでいらした先生ですから、余命を察しておられたのかもしれない。亡くなる少し前に先生から「俺に何かあった時には大井さんに俺が頼んでやるから心配するな」と言われていました。在学中に指導教授を失うとい

うのはたいそう心細いことでしたが、大井先生に指導教授をお願いにあがったところ快く引き受けてくださり、現在に至っています。先生には今でも年に2回勉強会をお願いしていて、先生の変らぬ研究への意欲に感嘆するとともに、このときばかりは大学院生時代の懐かしい気分に入る機会をいただいています。

私は関学の「英文学科」という名前が好きでした。単純明快、そのままの学科名ですが、そこがまたいいのです。名前はシンプルでも、多くの優れた研究者たちが作り、守ってきた長い歴史があります。私とその英文学科の歴史の中に身を置き、第一級の豊かな教育を授かったことは本当に幸運であり、私の大きな誇りになっています。学科再編成によって英米文学英語学専修という名前に変わりましたが、英米文学、英語学の世界で優れた研究者を輩出し、その伝統が引き継がれていることに変わりはありません。旧英文学科、英米文学英語学専修創設80周年を心からお祝いするとともに、今の学部生や大学院生のみなさんにはこの伝統を誇りに思い、歴史を繋いでいていただきたいと思います。

